

真の奇跡

マルコによる福音書4章35～41節
2023年1月22日
松田 基子 師

今日の社会は、科学の時代だと言われていますが、科学的知識に、絶対的な価値を置いている人々にとって、聖書の奇跡は、躓き(つまづき)になっています。

『そんな事は、科学的ではない』
と言って、科学と言う刀で切って、それを受け入れようとはしません。その様にして、多くの人たちは、聖書の奇跡に躓きます。しかし、それは自分を、
『科学と言う狭い世界に閉じ込めて
しまっている事に気付かないでいる』
からです。

科学も勿論大切です。そこでは必ず、神様の創造の素晴らしさに出会います。また、色々な事が科学的に究明されて、それを世界と、人間の幸せのために資する事は成すべきことです。ただ、科学は人間によって解明される世界ですから、人間の考えを越えることは出来ません。そこで人間以上の世界、人間を支配しておられる神様を知ることは、もっと大事なことです。

科学と信仰は土俵が違うのです。それを、自分の土俵に呼び込むことは出来ないのです。互いを尊重し合って併存し、更に良き世界を造っていく事が求められています。ただ、ここで大切な事は、
『科学の世界は、人間による探求ですから、どんなに頑張っても、80%までの世界であり、創造主である神様の世界に生きて、人間を超えた神様に委ねる、信仰に生きることによって、人は初めて100%の世界を生きる事が出来るのです。』

今朝の聖書箇所、マルコによる福音書4章35

節から、イエス様に依る奇跡が記されています。私達キリスト者もまた、奇跡について躓く者です。何故躓くのでしょうか、その奇跡が、
『今はもう、起こっていない』
ことへの躓きです。

『自分はこんなに祈っているのに、奇跡は起きない。聖書に記されている奇跡は本当に起こったのだろうか。それらしきことに、尾ひれが付いたのではないだろうか。』
『或いは奇跡は、今となっては確証出来ないのだから、考えない事している。』
『奇跡があっても、無くても関係ありません。私はキリストの生き方に倣いたいだけです。』
などなど、キリスト者にとっても、奇跡は問題を与えています。

しかし、私達がここで知らなければならない事は、イエス様は何も御自身を神の子として誇示しようとして、奇跡を起こされたことは一度もありません。いつも神様の目的に従って、神様の御名が崇められる為であり、そこにはその時の特別な目的がありました。それにイエス様の奇跡を信じなければ、信仰の力はありません。大事な事は、
『その奇跡は何を目的とされた奇跡だったのかを知ること』
です。

さて、マルコ福音書4章1節を見ますと、
「イエスは、再び湖のほとりで教え始められた。おびただしい群衆が、そばに集まって来た。そこで、イエスは舟に乗って腰を下ろし、湖の上におられたが、群衆は皆、湖畔にいた」と記されています。魂が飢え渴いていた民衆は、イエス様が語られる教えに、心癒され、遠くから近くから、イエス様の許に大勢の人々が集まり、それはおびただしい群衆となりました。

イエス様はその人たちに、話しをする為に、舟を求められ、岸から少し漕ぎ出して、舟を講壇代

わりにして、民衆を湖畔に座らせ、誰でも話が聞ける様になさいました。その日もイエス様は例え話を通して、神様の御心を民衆に教えられました。民衆は熱心に聞き入り、あつと言う間に時間は過ぎていきました。日が傾き始めました。群衆を解散させなければなりません、彼らには、帰ろうとする気配はありません。もしも、イエス様が岸に上がったなら、群衆は押し寄せて来るでしょう。

イエス様はそこで弟子達に、

「向こう岸に渡ろう」

と言われました。向こう岸であるガリラヤ湖の南東はデカポリス地方です。そこは異邦人の居住地です。イエス様の心は、異邦人にも向けられていました。36節を見ますと、

「そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった」

とあります。

ガリラヤ湖は、豎琴の様な形をしています。南北20km、東西の一番広い所が12kmです。その広さは、琵琶湖の4分の1です。大きな湖ではありません。当時、そこでは漁業が営まれ、険しい陸路を通るよりも、海路が便利で、人の往来、物流も盛んでした。しかし、そこには地形上の問題がありました。時に気象条件が重なるとガリラヤ連山から突風が、詳訳聖書では、台風級の大風が吹き下ろして来て、湖上を襲い、波は荒れ狂い、舟を転覆させ、命を奪う事もあるのです。

ガリラヤ湖の漁師だったペトロを初め、4人の漁師は、これまで何度か嵐を経験して来ましたが、昼間の穏やかな時は心配ないのですが、夕暮れから、向こう岸に行くことには一抹の不安がよぎったのではないのでしょうか。

『早く向こう岸に辿り着きたいものです。』漕ぎ出すと、イエス様も、弟子達も、昼間の緊張

が解け、湖の風は心地良く、眠りに引き込まれていきました。イエス様も疲れて眠ってしまわれました。ところが、舟がどのくらい進んだ辺りでしょうか、夕やみが迫る中、風は次第に強くなり、風のうなり声と共に、波は大きくなり、舟を揺らし、舟の中に水が入り込んで来たのです。

弟子達はいっぺんに目が覚めて、舟の中に入って来た水を、必死に掻き出しました。4人の漁師出身者は、これまでの経験をもとに、舟が沈まないように必死に対処しました。しかし、激しい突風はひどくなるばかりで、舟を転覆させそうです。こうなつては、イエス様に助けを求めしかありません。彼らが舟の後部、艫の方を振り向きますと、イエス様は何と、嵐の中でまだ眠っておられるではありませんか。イエス様にはこの大風に寸分の動揺もありません。

疲れた体を休め、熟睡しておられました。何と言う事でしょう、

『イエス様は、神様の御心を解き明かして下さる。多くの病人を癒して下さる。』イエス様は確かに並の説教者とは違って、神様がお遣わしになった、神様が働いておられるお方だ。

『しかし、私の命を助けるまでの力を持っておられるのだろうか、自分達がこんなに命の危険に晒されているのに、眠っておられる。自分の本当の助けにはならないのではないだろうか。』そんな思いを抱いた弟子もいたかも知れません。

しかしイエス様を揺り動かして起こした弟子は、

「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」

詳訳聖書では、

「滅びてもかまわないのですか」

と脅迫的に必死に、イエス様を起こしています。この弟子から、

『イエス様なら何とかして下さい。』

『イエス様しか頼る方はいない』

との、必至の思いが伝わって来ます。わたしたちの人生にも、様々の嵐が吹いて来ます。多くの方は、人生が、順風満帆であることを求めますが、順風満帆な人生が、決して良い人生とは言えません。それは神様の助けを必要とせず、神様を求めようとはしないからです。神様と出会わない人生は良い人生とは言えません。人生の航海に、突風は突然起こります。私の夫も、ひろ子さんも、或る日突然、癌の宣告を受けました。本人もさることながら、家族も大きなショックを受けました。人生行路に於ける突風、試練は、わたしたちの心を苦しめます。しかし、わたしたちはそう言う所に追い込まれなければ、イエス様に本気で、

『イエス様、わたしたちがおぼれても、滅んでしまってもかまわないのですか』

と、必死に訴えて行くことはないのです。

39節に、

「イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、

『黙れ。静まれ』

と言われた。すると、風はやみ、

すっかり風になった」

とあります。イエス様は神の御子であられ、三位一体である神様の天地創造に、御子も関わっておられました。ヨハネによる福音書1章1節に、

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった」

とイエス・キリストを神の言として証言しています。

神の言としての役目を担われた御子、イエス様は、天地創造に当たって、神様と共に万物を創造されたお方であり、またその支配者です。大自然も、御子イエス様の支配の下にあります。

イエス様の、

「黙れ。静まれ」

の、ひと言によって、突風が静まり湖は静かになりました。その後、イエス様は40節で、弟子たちに

「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか」と、諭されました。

弟子達は、

『突風によって、舟が転覆し、死んでしまうのではないか』

と恐れしました。人間にとって、死こそ最大の試練、最大の嵐です。人は何故、死を恐れるのでしょうか。それは死の彼方で、自分の存在がどのようになるのかが分からないからです。人間の存在は、死で終わってしまうものではありません。ヘブライ人への手紙、9章27節には、

「人間にはただ一度死ぬことと、その後

に裁きを受けることが定まっている」と記されています。神様に造られたわたしたち人間は、本能的にその事を感じているのです。わたしたちは誰も、神様の裁きに耐える事は出来ないで、永遠の滅びに、呑み込まれてしまう事を恐れるのです。

弟子達は、イエス様が人の病を癒されるという、身近な奇跡ばかりではなく、自然界をも支配される力を持っておられることに、非常に恐れて、

「いったい、この方はどなたなのだろう。

風も湖さえも従うではないか」

と、互いに感歎の声を上げています。

弟子達はまだ、真の意味で、イエス様が神の御子、メシア、救い主であること、までは、信じていません。そんな弟子達に、イエス様は、

「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか」

と言っておられます。イエス様は台風級の嵐の中でも、父なる神様のおおきな御手に守られていること、イエス様御自身が自然を支配し、制する力を持っておられる事から、風や波の激

しい音も、何ら恐れられることはありませんでした。しかし、弟子たちにはまだその信仰が有りませんでした。このような時、人間的な教師ならば、弟子たちに向かって、

「なぜ怖がるのか、しっかりしなさい」

と言ったでしょう。しかしイエス様は

「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか」

と言われました。このことについて考えてみましょう。

イエス様が人の子となって人の世に生まれて来られたのは、

『人類の罪を、十字架に贖い、人類に救いを与える為でした。しかし、弟子達はイエス様が十字架に架かれた時は、失望し、イエス様を見捨てて逃げ去りました。そんな弟子たちでしたが、イエス様が復活され、イエス様の方から出会ってくださり、愛し、赦して下さい、御言葉を解き明かして下さったことによって、イエス様が神の御子であられ、メシア・救い主であることの真の意味が分かったのです。』

それまでの弟子たちにとって、

『ガリラヤの突風を鎮められたイエス様は、十字架から降りてこられてこそ、そんな奇跡を起こされてこそ、神の御子だ』

とっていました。しかし、**本当の奇跡**は、神の御子が**人類の罪を贖って、人類に救いをお与えになったこと**です。わたしたちはここに、**真の奇跡を見るべき**です。

この様な奇跡をなされた神の御子が、病人を癒し、嵐を鎮められる事は易しい事です。

イエス様は弟子たちに

「まだ信じないのか」

と言われ、**彼らの信仰のために、この奇跡を起こしておられることが分かります**。弟子たちは、イエス様の復活、昇天の後、命を賭けて、

『イエス・キリストこそ真の救い主であることを宣べ伝えました。』

その事は、命に関わる事であり、殉教した弟子

達もいました。彼らは命の危険に晒された時、
『いつもガリラヤ湖の嵐を鎮められた、
イエス様が共におられ、自分の全存在を守って下さる事を確信して、天つ港を仰ぎ見たに違いありません。』

人生最大の嵐は、自分の死です。その死の嵐を鎮めることが出来るお方は、その者の罪を贖い、全存在を保証することが出来る、神の御子**イエス・キリスト**だけです。わたしたちはこの最大の奇跡を信じて、イエス様に賭けて、人生の海路をイエス様の舟に乗って、天つ(あまつ)港に向かって進んで参りましょう。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様。

あなた様は、神の御子が、わたしたち人類の罪を贖い、救われると言う奇跡を起こして下さいました。

これ以上の奇跡はありませんのに、自分の都合の良い奇跡を求める愚かさ、罪をお許し下さい。

イエス・キリストの御救いに、真の奇跡を見出し、この一事に賭けて、キリストの舟に乗り続け、天つ港に辿り着く者とならせて下さい。

救い主、イエス・キリストの
お名前によってお祈りをいたします。

アーメン。